引きこもりの兄を弟が撮った

# カメラがつないだ家族

引きこもりを抱えた家族は、何ができるのだろうか。
ドキュメンタリー映画「home」では、家族の闘いがさらけ出されている。何が兄の心を開かせたのだろうか。

壊れてしまった家族を、どうにかしたい。

「home」を監督した小林貴裕さん(26)は、家族と対話をするために、カメラを回した。

兄の博和さん(29)は、7年間、引きこもっている。母は、暴力を振るう兄におびえ、鬱病になった。祖母は末期ガン。父は争いにつかれ、家を出てしまった。

そんな家族から逃げるように、貴裕さんは東京へ出た。5年間、一度も長野県の実家へ帰らなかった。日本映画学校の卒業制作を作ることになり、貴裕さんは家族に向き合ってみようと思った。

## 後ろめたいから耐えた

だが、いざ母親にカメラを向けてみると、

「いやだよぉ、なんで撮っているのよ」

と泣かれた。その様子も、撮影した。家族をさらし者にするのか。自己嫌悪に陥り、4日間、カメラを持てなくなった。

だが撮るのをやめたら、家族から逃げ続けた自分を、また繰り返すだけだ。この状態を何とかして変えたい。せっぱつまっていた。

とはいえ、兄と話をすることが怖かった。兄の部屋に入ることさえ、ためらう。おそるおそる、外へ出るよう説得してみる。

「やりたいことを探して、やればいいじゃん。もう一回、大学入り直せばいいじゃん」

そう言うと、兄は声を荒らげて、殴りかかってきた。

「お前は何にも、わかっていないんだな。外に出られりゃ、苦労はないんだよ」

貴裕さんは、床に倒されてしまった。けんかする様子まで、すべて映画におさめられている。カメラという第三者の視点が入ることで、家族の関係は微妙に変わってくる。撮影は半年以上に及んだ。貴裕さんは、東京と長野を何度も往復した。もしカメラを持っていなかったら、恥ずかしくて家族と真剣に話ができなかった。「撮らせてもらっている」という後ろめたい意識があるからこそ、兄に罵倒されても、我慢強くなれた。かたくなだった兄も、貴裕さんの真剣さに心を打たれ、次第に心を開き始めていった。

## 「ただの怠け」から変化

東京では「BOX東中野」で、大阪では「シネ・ヌーヴォ」で、10月19日から公開されている。名古屋では来年1月からと、全国で公開される予定だ。

最初、貴裕さんは、兄は怠けているだけだと思っていた。でも外に出られなくて一番苦しいのは、兄なんだと気づいた。だから映画のサブタイトルを「ひきこもってもいいじゃないか。ちょっと遠回りするだけだよ。」とつけた。

「だれだって、立ち止まる時期は必要だと思うようになりました」

と貴裕さんが真剣な表情で話した。すると横にいた博和さんは、笑いながら混ぜっ返した。

「冗談じゃないよ。引きこもっていたら、よくないよ。つらいんだから。なんとか脱したいって、本人は必死で思っているんだよ」

引きこもっている状態が楽なのは、最初だけだ。外へ出られるようになりたい。そのきっかけを、必死で求めているのだという。小林家の場合、そのきっかけはカメラであり、弟の真剣さだった。

ラスト。兄はカメラを自分でセットして、家を出ていく決意を語る。弟も知らないうちに、その場面は撮影されていた。迷いながらも、覚悟を決める。真剣に向き合ってくれた弟や母への、自立宣言だ。貴裕さんは言う。

「家庭を壊した悪の張本人のようにしか見えなかった兄が、初めて本音を語った。引きこもっている本人の悩みや苦しみが、伝わるのではないかと思います」

兄の博和さん（左）は「すごい映画だなって思いました よ」。貴裕さん（右）は照れた

兄は潔癖性。台所などを、隅々まで磨き上げないと気が済まなかった。「home」から

編集部　平岡妙子